

〈論文〉

## 中学生の居場所欠乏感と友人関係のあり方との関連

石本雄真・西中華子

### Relations between Feelings of *Ibasho*-less (Rootless Feelings) and Friendship Styles among Junior High School Students

ISHIMOTO Yuma, NISHINAKA Hanako

キーワード：居場所，居場所欠乏感，居場所づくり，友人関係スタイル，中学生

Keywords: *Ibasho*, Feelings of *Ibasho*-less, Friendship Styles, Junior High School Student

#### 問題・目的

本来居場所という言葉は物理的な「居る場所」を示す言葉であり、使用される機会もそれほど多くはない言葉であったが、1990年代後半から頻繁に使用されるようになった(石本, 2009)。この使用頻度の上昇は、文部省の出した報告書による影響が大きいと考えられる。文部省は1992年に不登校に関する報告書を出し、その中で学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱した(文部省初等中等教育局, 1992)。この報告書では「心の居場所」と表現されているように、もともと居場所という言葉はわざわざ“心の”という言葉をつけなければ心理的な意味を含有しないような言葉であった。しかしながら近年では“心の”という言葉をつけなくとも居場所という言葉が心理的な意味を含有することは一般的になりつつある。このような意味の変容に伴って用いられる分野についても拡大がみられ(石本, 2009)、今ではさまざまな分野でさまざまな対象について居場所という言葉が用いられている。

使用頻度の上昇を不登校に関する報告書がもたらしたものであることも示すように、心理的な意味を含む居場所という言葉は当初不登校に関連して用いられるようになったものである(萩原, 2001)。心理的な意味を含む居場所という言葉が用いられるようになったきっかけとして、1985年に不登校の子どもたちの親が学校以外の行き場として作った「東京シューレ」が挙げられることが多い(芹沢, 2000; 住田, 2003など)。このように、当初から心理的な意味を含む居場所という言葉は、“居場所のない”子どもたちに対して居場所を提供する活動を行うという文脈の元用いられてきた言葉であるが、近年では居場所を提供することを居場所づくりと称した活動が拡がりを見せている。居場所づくりという言葉も当初は不登校に関連して用いられていたものであるが(例えば、朝日新聞社, 1990; 1992; 楠, 1992; 田中, 1992)、使用頻度の上昇とともに現在ではさまざまな対象を想定した居場所づくりが行われている。しかしながら、同様に「居場所づくり」という名称で活動が行われていても、その内容は多岐にわたり目的も様々である(西中, 2014)。その中には、対象や目的を明確にしないうまま行われているものも多く、効果の検証が行われているものは少ない(西中, 2014)。

心理的な意味を含む居場所という言葉は、「居場所がない」といった言葉が示すように欠乏感覚として認識されるものであり(萩原, 1997; 北山, 1993)、それゆえに居場所づくりは欠乏感覚をなくす取り組みとして拡がってきたといえる。しかしながら、現在ではさまざまな対象を想定して居場所づくりが行われており、必ずしも居場所づくりが居場所の欠乏感覚(居場所欠乏感)をもつ者だけを対象としているわけではない。このような現状における居場所づくりとしては、それぞれ対象や目的を明確にした上で活動を行うことが必要である。一方で、その中でも居場所づくりが当初対象としていたような不適応状況にあって居場所欠乏感をもつ者を対象とする活動については、居場所づくりによって居場所欠乏感をなくすという目的が達成される必要があると

いえよう。

しかしながら、居場所欠乏感がどのようなものなのかについて、またどういった状況に伴って生じるのかについては明らかではない。これまでの心理学研究においても、居場所の意味内容について明らかにしようとする研究はみられるが、居場所欠乏感について明らかにしようとする研究はほとんどみあたらない。居場所の意味内容について明らかにしようとする実証研究においては、居場所となる時間や空間を挙げてもらうものや(小畑・伊藤, 2001), 居場所がある状況について問うもの(中村, 1999), 居場所はどこかと問うものがみられる(杉本・庄司, 2006)。これらの研究で挙げられている居場所は家や自分の部屋, 家族や友人であり, 物理的な居場所や対人関係が含まれているが, 居場所欠乏感はいずれが欠乏している状況においてもつものであるとは考えにくい。居場所欠乏感をもつ者が皆家や自分の部屋がないわけではなく, 家族や友人がいても居場所欠乏感をもつ者がいる。不登校問題の場や心理臨床などの分野では, 居場所をありのままにいられるところであると捉えることが多いことから(石本, 2009), 家族や友人についてはその存在の有無よりもその相手との関係性が居場所欠乏感に関連すると考えられる。

居場所づくりが主要な対象としている青年期においては, 居場所に関する議論の発端となった不登校問題を始めとしてさまざまな問題が挙げられる。たとえば, 2000年以降中学校の不登校生徒の割合は2.5%を超える高い水準で維持している(文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2014)。不登校児童生徒の割合は2009年以降緩やかな減少が続いていたが, 2013年には再び上昇に転じ継続的な減少へと転換する兆しはみられない。また国際比較において, 学校を楽しんでいる小中学生の割合が日本は他国よりも小さいことが示されており(杉村・石井・張・渡部, 2007), 学校不適應の問題が不登校児童生徒以外にも広く共有されていることをうかがわせる。直接学校不適應の問題を表すわけではないが, 気分障害の有病率は小学4年生で1.6%, 小学5年生で2.1%, 小学6年生で4.2%, 中学1年生で10.7%であるとされ(傳田, 2008), 不登校児童の割合よりも高い割合で気分障害を有する生徒がいることも示されている。

このような現状において, 不適應を示す青年に対して居場所づくりを行っていくことは依然重要であるといえ, 実際にさまざまな活動が今後も行われていくであろう。その際, 居場所欠乏感をもつ者の居場所欠乏感をなくし適應感を高めるためには, 居場所欠乏感の内容を明らかにすることが必要であると考えられる。先述のように, 居場所に関する議論は不登校問題に端を発するものである。不登校については主要なきっかけが友人関係であることが示されており(北海道立教育研究所, 2005; 兵庫県立但馬やまびこの郷, 2008; 文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2014; 住本, 1998; 柳原, 2008), 友人関係が学校適應に強い影響を与えること(Aikins, Bierman, & Parker, 2005; 石津, 2007; 大久保, 2005; Stephen, Kelly, & Karen, 2008; 山本・仲田・小林, 2000)も示されている。このことから, 居場所欠乏感についても友人関係に関する問題が強く影響を与えると予想される。

友人関係については, これまで適應との関係が論じられる際, 親密な友人がいるかどうか(酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002; 田中・吉井, 2005)や友人からの受容や拒絶(Berndt, Hawkins, & Jiao, 1999, Buhs, 2005, Wentzel & Coldwell, 1997, Zettergren, 2003)など, 概して友人との関係が親密かどうかを指標としているものが多くみられる。しかしながら, 現代の日本の青年においては親密な友人関係が必ずしも心理的適應につながらないことが示唆されていることから(土井, 2008; 中西, 2005, 2008), 友人との関係が親密かどうかだけではなく, より詳細に現代青年の友人関係をとらえる必要があるといえよう。

これらのことから, 本研究では居場所欠乏感に友人関係に関する問題が大きな影響を与えるという仮説のもと, 不登校問題の中心的な年代である中学生を対象に調査を行い, 居場所欠乏感と友人関係のあり方について検討を行う。本研究では居場所欠乏感の内容を明らかにすることが目的となるため, 居場所の意味内容についてあらかじめ定義しその欠乏について尋ねるのではなく, 調査対象者が抱く居場所のなさをそのまま尋ねることとした。居場所についてあらかじめ定義を与えた上で調査を行った場合, その定義が友人関係のあり方との

関連に影響すると考えられ、本研究の目的が果たされないといえる。具体的には、居場所という語の説明を行わずに「居場所がない」と思うかどうかを尋ねた。なお、中学生の友人関係の多くが学校での友人関係であると考えられるため、本研究では居場所欠乏感についても学校における居場所欠乏感について調査を行う。友人関係のあり方について、本研究では石本ほか(2009)にならい、現代青年の友人関係に特徴的であるとされる友人との同調性の高さ(唐澤, 2001; 上野・上瀬・松井・福富, 1994)および友人との心理的距離の遠さ(栗原, 1989; 松井, 1990; 大平, 1995; 千石, 1985, 2005)のそれぞれの程度から友人関係スタイルを作成し分析を行う。このことを通し、居場所欠乏感をもつ者に対する居場所づくりとしてはどのような活動が有効なのかについて検討を行う。

## 方法

### 調査対象者

関西圏内の中学校1校の2年生生徒264名。そのうち、分析に用いる項目について分析に適さない回答をしている者を除外し、243名(男子130名, 女子111名, 不明2名)の解答を分析対象とした。なお分析に適さない回答とは、全て同じ回答、特定のパターンを繰り返している回答、全て欠損の回答であった。

### 調査時期・調査方法

2012年6月に実施した。学校に依頼し、クラスごとに各担任の教員が実施した。実施の際、回答は任意であること、回答の内容が成績と一切関連しないことについて、書面で説明を行った。調査は匿名での回答とした。

### 調査内容

**居場所欠乏感** 「学校に自分の居場所がない」という項目に対して、「まったくそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5件法で回答を求めた。

**友人との心理的距離尺度** 友人との心理的距離を測定するために、石本ほか(2009)の「友人との心理的距離尺度」を用いた(8項目)。高得点であるほど心理的距離が遠いことを示し、希薄化した友人関係を持つことを表す。それぞれどの程度あてはまるかを、「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

**友人への同調性尺度** 友人への同調性を測定するために石本ほか(2009)の「友人への同調性尺度」を用いた(9項目)。高得点であるほど同調性が高いことを表す。それぞれどの程度あてはまるかを、「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

## 結果・考察

石本ほか(2009)にならい、心理的距離得点および同調性得点の平均値でそれぞれ2群に分割し、それらを掛け合わせることで4つの友人関係スタイルを作成した。同調性が低く、心理的距離が近い群を尊重群、同調性が高く、心理的距離が近い群を密着群、同調性が低く、心理的距離が遠い群を孤立群、同調性が高く、心理的距離が遠い群を表面群とした。

友人関係スタイルと居場所欠乏感の程度との関連を検討するために、群ごとの居場所欠乏感得点の比較を行った。居場所欠乏感得点は孤立群で最も高く(2.25)、次いで表面群(1.96)、密着群(1.61)、尊重群(1.46)の順に低くなっていた。友人関係スタイルを独立変数、居場所欠乏感の程度を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ有意な差が示されたため、Bonferroni法による群間の多重比較を行った。多重比較の結果、孤立群と密着群、孤立群と尊重群との間にそれぞれ有意な差がみられた(Table1, 2)。孤立群に属する者は密着群や尊重群と比較し、学校での居場所欠乏感を感じる人が多いということが示された。

Table1 群ごとの平均値および分散分析結果

	<i>n</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値	偏 $\eta^2$
孤立群	56	2.25	1.16	6.70 ***	.09
表面群	48	1.96	.97		
密着群	62	1.61	1.00		
尊重群	48	1.46	.82		

Table2 多重比較結果

	<i>r</i>
孤立-表面	.13
孤立-密着 **	.28
孤立-尊重 ***	.38
表面-密着	.17
表面-尊重	.27
密着-尊重	.27

中学生は chum-group を形成する時期にあたとされ（保坂ら，1986；須藤，2003），同調的な友人関係を特徴とする時期である。そのような発達段階に則した友人関係を形成している者は居場所欠乏感を感じにくいことがうかがわれる。一方で，高校生が形成する段階にあたとされる peer-group の特徴を示す尊重群（石本ほか，2009）についても，密着群と同様に居場所欠乏感を感じにくいことが示された。このことから，中学生でありながらも先の発達段階にあたる高校生に特徴的である友人関係を形成していることも適応的であると考えられる。他方，有意な差は示されていないものの，表面群については相対的に居場所欠乏感を感じる人が多いという結果がみられた。表面群は孤立群とは異なり，友人との同調性が高く友人とともに行動するという特徴を持つため，一見良好な友人関係を形成しているようにみえるであろう。しかしながら，相対的には居場所欠乏感を感じる事が多く，居場所づくりの対象として考慮する必要がある者であると考えられる。また，表面群については，現代青年の友人関係の特徴を強く表す群であることから（石本ほか，2009），現代青年の友人関係のあり方は居場所欠乏感を生み出しやすい可能性があるといえよう。

これまでの居場所に関する研究においても，調査の結果居場所を友人とするものがみられたが（小畑・伊藤，2001；白井，1998），そこではその友人との関係性については問題とされていなかった。しかしながら，本研究の結果では友人との関係のあり方によっては居場所欠乏感を強めることもあれば弱めることも示された。このことから，居場所欠乏感をなくすための居場所づくりを行う際には，友人関係のあり方に影響を与えるような介入が必要とされるといえよう。

## 総合考察

本研究では，居場所欠乏感をもつ者に対して有効な居場所づくりを検討するため，居場所欠乏感が友人関係のあり方と関連するという仮説のもと，どのような友人関係が居場所欠乏感と関連するのかについて検討を行った。その結果，友人への同調性が低く友人との心理的距離も遠いといった友人関係に乏しい者は居場所欠乏感を感じる事が多く，友人への同調性が高く友人との心理的距離も近いといった密着した友人関係をとる者や，友人との心理的距離は近いものの友人への同調性は高くないといった友人関係をとる者は居場所欠乏感を感じる事が少ないということが示された。

国立教育政策研究所（2015）は居場所づくりを「児童生徒が安心できる，自己存在感や充実感を感じられる場所をつくりだすこと」と定義しているが，これは本研究の結果から考えられる有効な居場所づくりとは必ずしも一致するものではない。国立教育政策研究所のいう居場所づくりについては特に対象者が明示されていないため，居場所欠乏感を強くもたない一般の児童生徒を対象としているとも考えられるが，居場所欠乏感をもつ児童生徒への対応としては十分ではないといえよう。

本研究の結果から，友人関係のあり方を変えることで居場所欠乏感を減らすことができる可能性が考えられる。このことに関連する研究として，小中学生を対象としたものではソーシャルスキルトレーニング（SST）として友人関係に関わるスキルをターゲットとするものがみられるほか（例えば，荒木・石川・佐藤，2007；江村・岡安，2003；本田・大島・新井，2009），幼稚園児から高校生に対する社会感情学習（SEL: Social and Emotional

Learning) の効果として望ましい社会的な行動が増加することも示されている (Durlak, Weissberg, Dymnicki, Taylor, & Schellinger, 2011)。しかしながらこれらはいずれも直接的に友人関係のあり方の変容を確認しておらず、友人関係のあり方が変容するかどうかは定かではない。今後は友人関係のあり方を効果指標とする介入実践についても行っていく必要があるだろう。

また、本研究において表面群は相対的に居場所欠乏感を感じやすい傾向が示されたため、表面群に対する支援も必要であると考えられるが、友人との心理的距離は遠くとも友人に同調することで友人関係を継続している表面群は、友人関係についてのスキルを身に付けているともいえる。このため SST による介入を考える際にも、友人関係におけるトラブルを生じさせないために必要となるような同調のスキルだけではなく、心理的距離を近づけるようなスキルをターゲットとして介入することが必要となるであろう。

石本雄真 (鳥取大学大学教育支援機構・教員養成センター)

西中華子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

## 文献

- Aikins, J. W., Bierman, K. L., & Parker, J. G. (2005). Navigating the transition to junior high school: The influence of pre-transition friendship and self-system characteristics. *Social Development*, **14**, 42-60.
- 荒木秀一・石川信一・佐藤正二 (2007). 維持促進を目指した児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, **33**, 133-144.
- 朝日新聞社 (1990). 登校拒否児の「居所」考える 27日, 四街道で市民団体 千葉 朝日新聞 朝刊 1990年05月25日
- 朝日新聞社 (1992). 視点変化 (摸索する子供たち 戸塚ヨット判決を前に: 中) 朝日新聞 朝刊 1992年07月16日
- Berndt, T. J., Hawkins, J. A., & Jiao, Z. (1999). Influences of friends and friendships on adjustment to junior high school. *Merrill-Palmer Quarterly*, **45**, 13-41.
- Buhs, E. S. (2005). Peer rejection, negative peer treatment, and school adjustment: Self-concept and classroom engagement as mediating processes. *Journal of School Psychology*, **43**, 407-424.
- 傳田健三 (2008). 児童・青年期の気分障害の診断学: MINI-KID を用いた疫学調査から 児童青年精神医学とその近接領域, **49**(3), 286-292.
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄: 「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房
- Durlak, J. A., Weissberg, R. P., Dymnicki, A. B., Taylor, R. D., & Schellinger, K. B. (2011). The impact of enhancing students' social and emotional learning: A meta-analysis of school-based universal interventions. *Child Development*, **82**, 405-432.
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, **51**, 339-350.
- 萩原建次郎 (1997). 若者にとつての「居場所」の意味 日本社会教育学会紀要, **33**, 37-44.
- 萩原建次郎 (2001). 子ども・若者の居場所の条件 田中治彦(編), 子ども若者の居場所の構想 (pp.51-65) 学陽書房
- 北海道立教育研究所 (編). (2005). 不登校児童生徒の支援に関する研究: 地域 SSC を中核とした実効性のある支援を実現するために 北海道立教育研究所
- 本田真大・大島由之・新井邦二郎 (2009). 不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果: ターゲット・スキルの自己評定, 教師評定, 仲間評定を用いた検討 教育心理学研究, **57**, 336-348.
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討: ある事例を通して 心理臨床学研究, **4**(1), 15-26.
- 兵庫県立但馬やまびこの郷 (2008). 平成19年度「但馬やまびこの郷サテライト事業」 (問題を抱える子ども等の自立支援事業) 報告書
- 石本雄真 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**, 93-100.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日瀨淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133.
- 石津憲一郎 (2007). 中学生の学校環境に対する主観的重みづけと学校適応: 心身の適応との関係から カウンセリング研究, **40**, 225-235.
- 唐澤由理 (2001). 男子高校生の友人との同調的行動と心理的距離: 友人と共に居ることによる安心感 学校メンタルヘルス, **4**, 49-54.

- 北山 修 (1993). 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 国立教育政策研究所(2015). 生徒指導リーフ Leaf.2 「絆づくり」と「居場所づくり」 (2版)
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明: 制度と若者のインターフェイス 新曜社
- 楠 凡之 (1992). 登校拒否児の発達権保障のためのネットワークづくりの課題: 「居場所」づくりの問題を中心に (<特集>不登校・登校拒否と教育の課題) 季刊障害者問題研究, **69**, 28-42.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編), 社会化の心理学ハンドブック: 人間形成と社会と文化 (pp.283-296) 川島書店
- 文部省初等中等教育局 (1992). 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否 (不登校) 問題について: 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2014). 平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 中西新太郎 (2005). ポジションどり文化の生きづらさを越えて 生活指導, **612**, 42-49.
- 中西新太郎 (2008). 少年少女の孤立と友だち階層制 生活指導, **659**, 42-49.
- 中村泰子 (1999). 「居場所がある」と「居場所がない」との比較: ○△□法の基礎的研究として 児童・家族相談所紀要, **16**, 13-22.
- 西中華子 (2014). 居場所づくりの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究, **13**, 7-20.
- 小畑豊美・伊藤義美 (2001). 青年期の心の居場所の研究: 自由記述に表れた心の居場所の分類 情報文化研究, **14**, 59-73.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 千石 保 (1998). 日本の高校生: 国際比較でみる 日本放送出版協会
- 千石 保 (2005). 日本の女子中高生 日本放送出版協会
- 芹沢俊介 (2000). 居場所について. 藤竹 暁(編), 現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ 3 現代人の居場所(pp.35-46) 至文堂
- 白井利明 (1998). 若者に居場所はあるのか 大学進学研究, **108**, 54-59.
- Stephen, A. E., Kelly, S. F., & Karen, L. B. (2008). Early adolescent school adjustment: associations with friendship and peer victimization. *Social Development*, **17**, 853-870.
- 須藤春佳 (2003). 前青年期の「chumship 体験」に関する研究: 自己感覚との関連を中心に 心理臨床学研究, **20**(6), 546-556.
- 杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, **54**, 289-299.
- 杉村仁和子・石井秀宗・張 一平・渡部 洋 (2007). 児童生徒用ソーシャルスキル尺度(SSI-M)開発研究報告書 東京大学大学院教育学研究科教育研究創発機構教育測定・カリキュラム開発(ベネッセコーポレーション)講座
- 住田正樹 (2003). 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南 博文(編), 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp.3-17) 九州大学出版会
- 住本克彦 (1998). 人間関係のもつれから不登校になった子ども達の事例を通しての一考察 研究紀要 (兵庫県立但馬やまびこの郷), **1**, 17-24.
- 田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響. 心理臨床学研究, **23**, 98-107.
- 田中智雄 (1992). 登校拒否(不登校)問題について: 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して (学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報, **44**(2), 25-29.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **2**, 21-28.
- Wentzel, K. R., & Caldwell, K. A. (1997). Friendships, peer acceptance, and group memberships: Relations to academic achievement in middle school. *Journal of Educational Psychology*, **90**, 202-209.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 (2000). 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連: 学校不適応予防の視点から カウンセリング研究, **33**, 235-248.
- 柳原 守 (2008). 不登校の要因をふまえた対応について 研究紀要 (兵庫県立但馬やまびこの郷), **11**, 1-8.
- Zettergren, P. (2003). School adjustment in adolescence for previously rejected, average and popular children. *British Journal of Educational Psychology*, **73**, 207-221.